

小林一茶

滑稽句とペーソス③

小林英昭

さて、話を冒頭のチャップリンにもどそう。名作の多い彼の映画の中に「街の灯」という作品がある。この映画の筋に詳しくふれるのは、本論の趣旨とはずれてしまう。よって、ここでは筋にはごく簡単にふれるだけにしよう。

街の放浪者チャーリーは、ふとしたことから盲目の花売り娘と知りあう。彼女の眼を手術で治そうと一生懸命に頑張るが、思うようにはいかない。そんなある日、偶然大金が彼の手に入る。そのお金を手術代にして、娘はひかりを取り戻す。だが、彼はそのお金のことで、牢獄につながれる身となる。刑期を終え、出所した彼を恩人とも知らず、逆に娘は貧乏ないでたちの彼をあわれと思い、小銭を与えようとして手がふれたとき、その感触で彼女は真実を知る。

ざっとまあ、こんな筋だが、筆者がここで言いたいのは、放浪者チャーリーを演ずるチャップリンの見事さである。外見は、例の山高帽、どた靴、ステッキ姿のいわば「滑稽」ないでたち。(これは、チャップリンの発明した見た目の「滑稽のスタイル」だと思う。筆者。)だが、そのような外見で演ずる滑稽の芯にチャップリンは人間の持つ哀感、哀愁、悲哀をしつかりとすえるのである。

大いなるペーソスの灯を観客の胸に灯すのである。滑稽とペーソスをくりかえし演ずることにより、人間ありのままの赤裸々な姿を観客に見せ、

見る人をして、感動を呼び起こさせるのである。

そう、筆者が言いたいのは、外見上のただの「滑稽」ではない。このようなペースに裏打ちされた確固たる「滑稽」なのである。彼は、それを見事にスクリーンを通して観客に演じて見せるのである。さらに言えば「人間」そのものを演じて見せるのである。それ故、チャップリンは世界の喜劇王と称賛されることとなるのである。と、筆者は思う。

さて、一茶における「滑稽とペース」チャップリンにおける「滑稽とペース」洋の東西、俳句と映画の違いはあっても人間を詠むとき、人間を演ずるとき、ペースに裏打ちされた「滑稽」ほど人のところに迫り、揺り動かすものはないのである。そして、それが俳人、俳優としての強烈な彼らの「個性」でもあると思う。さあ、はたして、このような筆者の主張が正鵠を得ているかどうかは、読者の懸命なるご賢察に待ちたい。

待てよ、そうか、ひょっとすると筆者は滑稽句とペースを語るについて、一茶の句に、その句が好きならば、少しくフライングに近い肩入れをしすぎているのかもしれないなあ～。

俳諧とはもともとそんな片ひじ張ったものの言い様を嫌う事から始まった「文芸」なのだから。こころしておかねば。すぐに、反省。

なお、滑稽句と個性についても語ってみたいが、それはつぎの機会に譲ろう。

*参考＝「一茶」藤沢周平（文春文庫）、一茶俳句集（岩波文庫）